

始まりである。先生を尋ねた。宿をとる。この別荘の。普通の。私。旅館。事。口。さ。近。思。若。の。私。

四

私は月の末に東京へ帰った。先生を避暑地を引き。上別れる時に「聞いてい。少。私。少。内。来。先。た。

先生は。先。望。さ。せ。れ。た。全。失。た。な。れ。て。な。が。つ。た。私。は。な。始。の。素。い。

先生は。自。分。近。づ。こ。う。と。す。人。間。に。近。づ。ほ。どの。先生は。自。分。近。づ。こ。う。と。す。人。間。に。近。づ。ほ。どの。

五

私は。両。方。の。人。が。墓。地。を。植。す。と。手。前。に。あ。る。苗。畠。の。左。側。か。ら。は。い。っ。て。行。っ。た。す。が。い。人。が。ふ。

に光るまで近く寄って行っ。そうして出し抜けに
「先生」と顔を見たら、先生は突然立ち留ま
った。どうして……」
「先生は同様の二遍繰り返した。その言葉は森
閑とした昼の何となく。繰り返された
。「私の急を来たのですか。どうして……」
先生は態度はむしろ落着いていた。声はむしろな
い。一種の曇りがあつた。
「私は私どうして来たか先生に話した。
「誰の墓へ参りに行つたか、妻がその人の名をい
「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」
「そうですね、始めて会つたあなたに。いう必要がないん
だから」
先生はようやく得心したらしい様子であつた。し
かし私はその意味がまるで解らなかつた。
先生と私は通つて墓の間を抜けた。
依傍一切衆生悉有仏生とい書いた塔婆などが建てて
あつた。全権公使何々というのもあつた。私は安得
と彫り付けた小さい墓前で、「これは何と読む
ませう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読
ませう」といふのでしうね」といって先生は苦笑した
。
先生はこれら墓標が現わす人種々の様式に対し
て、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしか
つた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指し
て、しきりにかかれこれいいが、しまいに「あなたは死とい
は黙って聞いて真面目に考えた事がありませぬ」とな
う事実はまだ先生もそれぎり何ともいわな
くなつた。
墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すよ
うに立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を
見上げて、「もう少しすると、綺麗な面は金色の落葉
がで埋まらう。黄葉のまですすむといつた。先生は月一
度ずつは必ずこの木の下の面をならして新墓地を作つて
向うの方で凸凹の地面を休めて私たちを見ていた。私た
いはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。私は、ただ
これかからこへ行くといふ目的はない。私は、ただ
先生を利かなく歩いた。それで私はさほどの窮屈を感

じなかつたので、ぶらぶらいっしょに歩いて行つた
。「すぐお宅へお帰りですか」
「ええ、別に寄る所もありませんから」
二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。
「先生の宅の墓地はあすこにあるんですか」と私
がまた口を開き出した。
「いいえ」
「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓
ですか」
「いいえ」
先生はこれ以外に何も答へなかつた。私もその話
はそれぎりして切り上げた。すると一町ほど歩い
た後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。
「あすこには私の友達の墓があるんです」
「お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」
「そうですね」
先生はその日これ以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するようになつた。
行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数が
重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足
を運んだ。
けれども先生对我的態度は初めて挨拶をし
た時も、懇意になつたその後も、あまり変りはないか
つた。先生は何時も静かであつた。ある時は静か過
ぎて淋しいくらいであつた。私は最初から先生には
近づきがたい不思議があるように思つていた。それ
いでいて、どうしても近づくなければいけないとい
う感じが、どこかに強く働いた。こういう感じが先
生に対してでもついてもいたものは、多くのうちでは
この直感が私だけ知れない。しかしその私だけに
この直感が後になつて事実の上に証拠立てられたの
だから、私は若々しいといわれても、馬鹿げている
と笑われても、それを見越した自分の直覚をとにか
く頼もしくまた嬉しく思っている。人間を愛し得る
人、愛せうずにはいられない人、それでいて自分の懐
に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事
のできない人、——これが先生であつた。
今いた通り先生は始終静かであつた。落ち付い
ていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切
る事があつた。窓に黒い鳥影が射すように。射すか
と思つて、すぐ消えるには消えたが。私が始めてそ
の曇り、先生を眉間に認めた時は、雑司ヶ谷の墓
で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はそ

ろうと思ふ。しかし先生にこういわれた時は、まるで
で反対であった。癪に触らないばかりでなくかえつ
た愉快は淋しい。人間です」と先生はその晩またこの間
の言は葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、こ
のとはよくあなも淋しい人間じゃないですか。私
は淋しくもあなもあなは淋しいから、動かずにいら
れるが、若い動かしは行かないでしよう。動いて何かに打つ
動けたら動かしなう……」
「私はちっとも淋しくはありません」
「若いうちほど淋しいものはありません。そんなら
なぜあなはそうたびたび私の宅へ来るのですか」
「ここでもこの間言葉がまた先生の口から繰り返
された。たは私に会ってもおそらくまだ淋しい気がど
「あなでしてはいるでしよう。私にはあなたのためにそ
この淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がな
いんだから。あなは外の方を向いて今に手を広げ
なければなりません。今に私の宅の方へは足
が向かなくなりまして淋しい笑い方をした。

八

幸いなに時先生の予言は實現されずに済んだ。経
験の意義にさえ私了解し得なかつた。私に依然として
先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食
卓で飯を食うよばならないようになつた。奥さんと
普通の人間として私は女に對して冷淡でなかつた。境
か。けつても年若は私に今交際しなかつた。疑はなかつた。結
んだ事がなかつた。それが源因かどうか女に向か
、私の興味は往來であつた。先生の印象を受けない
て多くなつた。美しい印象をこれ以外に物もなかつた。だ
に、これは奥さんにかつたのだと解釈する方が正
示す機会なし。心持奥さんだから中間に立つ
分のような心持奥さんだから中間に立つ

れば、つまり二人はばらばらになつていた。それで
始めて知り合う外になつた時の奥さんについて、た
だ美しい時といは先生は何の感も飲まされた。その時奥
さんが出て来て傍で酌をしてくれた。先生はいつも
より愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上
がりと」といって、自分の呑み干した盃を差した。奥
さんは「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうに
それを受け取つた。奥さんは綺麗な唇を寄せて私行
の半分ばかり注いで上げた盃を唇の先へ持たせて
「奥さんと先生の間に下のような会話がしまつ
た。珍らしい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多に
ないのにね」
「お前は嫌いなよ。しかし稀には飲むといいよ
。好い心持にならないわ。苦しいぎりでもあなた
は大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上がると」
「時によると大変愉快になる。しかしいつでもとい
うわけにはいかない」
「今夜はいかがです」
「今夜は好い心持だね」
「これから毎晩少しづつ召し上がると宜ござんすよ
」
「そうはいかない」
「召し上がって下さいよ。その方が淋しくなかつて
好いから」

先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに
大抵はひそりして高笑い声などの聞こえない
試しはまるでなかつた。或る時は宅の中にも
のは先生と私だけのやうな気がした。
「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の
方を見ていって。私は「そうですね」と答えた。
しかし私の心には何の同情も起らなかつた。子供を
持たした私にはその時の私は、子供をただ蒼蠅いも
ののうに考へていた。
「一人貫つてやろうか」と先生がいった。
「貫ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方
を向いた。
「子供はいつまで経つたってできっこないよ」と先
生がいった。
奥さんは黙つていた。「なぜです」と私が代りに
聞いた時先生は「天罰だからさ」といって高く笑つ
た。

十三

我々は群集の中にいた。群集はいつでも嬉しそう
 な顔をしていて、そこを通り抜けて、花も人も見え
 ない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にす機会
 がなかった。「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。
 「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は
 前「なぜですか」
 「なぜですか」今に解ります。今にじゃない、もう解っ
 ているはずですよ。あなたの心はとっくの昔からす
 べて恋で動いているじゃありませんか」
 私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそ
 こは案外な空虚であった。思いあたるようなものは
 何にもなかった。「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。
 私は先生に何も隠してはいないつもりです」
 「目的物がなくて動くのです。あれば落ち付ける
 だろうと思って動きたくありません」
 「今それほど動いちゃいません」
 「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃ
 ありませんか」
 「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは
 違います」
 「恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、
 まず同性の私の所へ動いて来たのです」
 「私には二つのものが全く性質を異にしているよう
 に思われます」
 「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに
 満足を与えられない人間なのです。それから、ある
 特別な事情がある、なおさらあなたに満足を与え
 られないのです。私は実際お気の毒に思っています
 ます。あなたが私からよへ動いて行くのは仕方が
 ない。私はむしろそれを希望しているのです。し
 かし……」
 私は変に悲しくなった。
 「私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕
 方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだ
 ありません」
 「先生は私の言葉に耳を貸さなかった。
 「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだ
 から。私の所では満手が得られない代りに危険もな
 いが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知
 っていますか」
 私は想像で知っていた。しかし事実としては知ら
 なかった。いづれにしても先生のいう罪悪という意

味は朦朧としてよく解らなかつた。その上私は少し
 不愉快になつた。「先生、罪悪」という意味をもっと判然
 「下さい。それでなければこの問題をここで切り上
 げて下さい。私自身に罪悪」という意味が判然解るま
 で」
 「悪い事をした。私はあなたに真実を話している気
 でいた。ところが実際は、あなたを焦慮していたの
 だ。私は悪い事をした」
 「先生と悪い事は博物館の裏から鶯溪の方角に静かな
 歩調で歩いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に
 茂る熊笹が幽邃に見えた。
 「君は私がなぜ毎月雑司ヶ谷の墓地に埋っている友
 人の墓へ参るのか知っていますか」
 「先生がこの問いは全く突然であつた。しかも先生よ
 く承知していた。対してはしばらく返事をしなかつた。
 すると先生は始めて気が付いたようにこういつた。
 「また悪い事をいつた。焦慮させるのが悪いと思つて
 、説明しようとする、その説明がまたあなを焦
 慮させるよ、結果になる。どうも仕方がない。こす
 問題はこれです。もうとしかなく恋は罪悪です
 よ、よござんすか。そうして神聖な罪悪です」
 私には先生の話がますます解らなくなつた。しか
 し先生はそれぎり恋を口にしなかつた。

十四

年の若い私はややともすると一図になりやすかつた。
 少なくとも先生の眼にはそう映つていたらしい
 。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益な
 のであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有
 難いのであつた。とくれば詰まりいへば、教壇に立
 ち守つて私を指導してくれ偉い人々をより見たので
 守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたので
 あつた。
 「あんまり逆上ちゃいけません」と先生がいつた。
 「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の
 私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯が
 つてくれたなかつた。
 「あなたに熱に浮かされているのです。熱がさめ
 ると厭になります。私は今のあなたからそれほど思
 われるのを、苦しく感じています。しかしこれから
 先あなたに起るべき変化を予想して見ると、なお
 苦しくなります」
 「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それ
 ほど不信用なんですか」

私はまだそれから奥さん困る茶碗「もすく妙な顔さんども愛嬌は私だ。あなた大変黙り込んだ。飲んではしゃいだ。何かうとまた議論を仕掛けるなんて、叱り付けられさか」と奥さんが再び話した。そうして二人は共通の興味のある先生を問題にした。奥さん、先刻の続きをもう少しいわせて下さいませんか。奥さんには空の理屈と聞こるかも知れませんが、私はそんな上空でいって「じゃおっしやい」

「今奥さんが急になくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりゃ分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見よ外に仕方がないじゃないわ」

「奥さん、正直に答えて下さいよ。だから逃げちゃいけない。正直に答えて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていいんですから、あなたに伺います」

「何もそんな事か」

「真面目くさって聞くがものはない。分り切るとおっしやるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらは先で先生に忠実なあなたが急になくなった、先生は面どうなんでしょう。世の中のとちを向いて

なくない。たは後でどうなるでしよう。先生から見て

「そりゃ私から見れば分っています。（先生はそう思っているかも知れませんが）。先生は私を離れなうか」

「私も知れませぬ。そういってでんけなうか」

「それは別問題ですわ」

「やっぱ先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんですよ。世間というより近頃では人間が嫌いになっていっているんですよ。だからその一人として、私も好かれるはずがないじゃないか」

奥さんの嫌われているという意味がやっと私に呑み込めた。

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟を与えた。それで奥さんはその頃流行り始めた新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際をした経験のない迂闊な青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬の目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だが実際、たの女の前へ出ると、私の感情が突然変わる事が引きつけられる前に、その場に臨んで女かえって変な反撥力を感じた。奥さんに対して私にはそんな気がまらなかつた。普通男女の間に横たわった不平平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実な先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

りましたわ」情をいう時ですら、奥さんは別に面倒く
さいな苦顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ父
事になった。私の母が受けた手紙の今が父と
いう病気の経過が面白くない年が年だから、でき
都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあ

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人
にしばし見ると、父のこの病は慢性であった。人生
も家族の要心も信じて疑わなかつた。現に父は養生
のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たよ
うに客が来てと吹聴していた。その父が、母の書信
による庭へ出て何かしている機に突然眩暈がし
て引ッ繰り返った。家内のもは軽症で脳溢血だと思
い違えてはなぐらう。その手当をばり持病の結果どう
う判断するに始つて、始めて、卒倒と腎臓病とを結び付け
て考えるようになったのである。

冬休みが来るとは、まだ少し間があった。私は学期
の終りまで待たせても差支えあるまいと思つて一日二
日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している
顔だのが時々眼に浮かんできた。そのたびに一種の心苦
しさを嘗めたら、私はとうとう帰る決心をした。国か
ら旅費を送らせよう。先生の手数を省くため、私は暇乞
いかけた先生の手所へ行って、要るだけの金を一時
立て替へて、少風邪の味で、座敷へ出るのが臆劫だ
といつて、私を稀に見るやうな懐かしい和やかな日光
が机掛の上へ射して来た。先生はここの日あたりの懸
好い室の中へ立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを
防いでいた。

「大病は好い、ちょっとした風邪などはかえつて
厭なものです」
「先生は病氣をしたら事のない人であつた
先生は言葉を聞いて、私を笑いたくなかつた。
「私は風邪が、先生だつて同じ事でしょう。試みに

「先生は病氣をしたら事のない人であつた
先生は言葉を聞いて、私を笑いたくなかつた。
「私は風邪が、先生だつて同じ事でしょう。試みに

やつてご覧になるよ、よく解ります」
「そうかとね、私は病気に気がなから、死病に罹
りたいは先生のこと、格別注意を払わなかつた。す
ぐ母の手紙の話をしよ。その金無心を申し出た。
「そりゃ困るでしよ。そんないなら今手元にあ
るはずだか、奥さん、呼んで、必要の金額を私の前
に並べさせてくれた。奥さんは、白い茶紙の上へ鄭
重に、「そりゃ心配です」と先生が聞いた。
「何遍も卒倒したんでは、先生が聞いた。
「手紙には何とも書いてありませんが。——そんな
に何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」
「先生、奥さんの母親という人も私の父と同じ病
で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。
「どうせむずかしいんでしよ」と私がいつた。
「そうさね。私が代られば代つてあげても好いが
。——嘔気はあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大方ないん
でしよ」
「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さん
がいつた。
私はその晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病氣は思つたほど悪くはなかつた。それでも
着いた時は、床の上に胡坐をかいて、「みんなが心
配するから、まあ我慢してこう凝としてゐる。なに
もう起きても好いのだ」といつた。しかしその翌日
から母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げ
させてしまつた。母は不承無性に太織りの蒲団を
みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に
気が強くおななんだよ」といつた。私には父の挙
動がさして虚勢を張つてゐるやうにも思えなかつた。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは
万一の事がある場合でなければ、容易に父母の顔を
見る自由の利がない男であつた。妹は他国へ嫁いだ
。これも急場の間に合つた。おいそれと呼び寄せら
れる女ではなかつた。兄妹三人のうちで、一番
便利なのはやはり書生をしてゐる私だけであつた。
その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出して
、休み前に帰つて来たという事が、父には大きな満
足であつた。

「これがきの病気が学校を休ませてもは気の毒だ。お
母さんがあまり仰山下手紙を書くものだからいけな
い」父は口ではこういった。こういったばかりでなく
、今まで敷いた床を上げさせて、いつものよう
に元気を示した。ずみをしてまた逆回すといけません
「あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけません
よ」私のこの注意を父は愉快そうにしかし極めて軽く
受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心さえして
いれば」

「実際父は大丈夫らしかった。家中を自由に往来
して、息も切れなければ、眩暈も感じなかった。ただ
顔色だけ普通の人よりも大変悪かったが、これは
それまに今留めなかつた。

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月
上京する時に持参するからそれまで待つてくれるよ
う断わった。そうして父の病状の思ったほど陰気
でな無も無も一言のを見舞ふに連ね加えた。私は先生
の風邪を軽く見ているので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期
していなかった。出した後で父や母と先生の噂など
をしなから、遙かに先生の書斎を想像した。行って
お上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞを食うかしら
」

「旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」
私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であ
った。

先生の返事が来た時、私はちょっと驚かされた。
この内容が特別の用件を含んでいなかった。時
、驚かされた。先生はただ親切で、返事を書いた
てくれたんだ。私には思った。そう思うと、その簡
単な手紙が私には大層な喜びになった。もつと
違ふ。この手紙が先生から受け取った第一の手紙には相
違ふ。第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

「第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

ないで、床を上げてからも、ほとんどの戸外へは出
なかつた。一度天気がよくなるまで、父は笑
、今まで敷いた床を上げさせて、いつものよう
に元気を示した。ずみをしてまた逆回すといけません
「あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけません
よ」私のこの注意を父は愉快そうにしかし極めて軽く
受けた。

二十三

私は退屈な父の相手としてよく将棋盤に向か
。二人も無精な性質の、炬燵にたがったまま
、盤を櫓の上から出さず、駒を動かす事だ
、駒を掛けた。次の勝負が上がるまで双
に、火箸で挟み上げる。それと、灰の中
、「碁盤だと盤が高過ぎる上に、足が着
炬燵の上では打てないから、そこへ無精
いね、こうして楽に差せよう」

「父は勝つた。もう一番やろう」とい
のくせに負け、もう一番やろうとい
するに、勝つても負けても、炬燵に
を差したがる男であつた。始めのう
、この隠居じみた娯楽が私にも相
が、少し時日が経つに伴って、若
くらしい刺戟で満足できなくなった。私
握つた。頭の上へ伸ばして、時々思
くびをした。

私は東京の事を考えた。そうして張る心臓の血潮
の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不
思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態
、先生の心で強められて、父と先生とを比較して
、私は心の中で父と先生とを比較して見た。両
方とも世間から見れば、生きていて死んでい

分らないほど大人しい男であつた。他に認められ
という点からいえば、どの零でもあつた。それで
て、この将棋を差したりする父は、単なる娯楽の
として私には覺えの足りない先生は、歓楽の交際
に往來を以て、いづか私の頭に影を落とすから、私
る親しみを以て、いづか私の頭に影を落とすから、私
。ただ頭といふのはあまりに冷やか過ぎるから、私
は胸といるといつも、血のなかには先生が流れてい

「第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

「第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

「第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

「第一という。私と先生の間に書信の往復がたび
びあったように思われるが、事実は決してそうでな
い。私は先生の生前は胸といるといつも、血のなか
に先生が流れてい

明、白な事、實を、こ、と、さ、ら、に、眼、の、前、に、並、と、べ、て、み、て、始、り、返、し、て、く、れ、た、中、に、先、生、は、こ、ん、な、事、を、い、っ、た、。
め、て、大、き、な、真、理、で、も、発、見、し、後、か、し、の、か、ご、と、父、と、く、に、驚、い、た、も、な、
今、私、が、珍、し、い、よ、う、い、け、ま、せ、ん、
は、夏、休、み、な、と、思、う、が、当、座、一、週、間、ぐ、ら、い、は、下、に、も、置、
持、だ、ら、う、よ、り、越、す、と、あ、り、は、そ、ろ、そ、ろ、に、家、族、の、熱、が、冷、い、
か、な、い、よ、り、越、す、と、あ、り、は、そ、ろ、そ、ろ、に、家、族、の、熱、が、冷、い、
定、規、通、り、越、す、と、あ、り、は、そ、ろ、そ、ろ、に、家、族、の、熱、が、冷、い、
め、て、よ、う、い、け、ま、せ、ん、
も、の、私、滞、在、中、に、取、り、扱、わ、れ、が、ち、な、る、そ、の、上、私、は、
国、へ、帰、ら、る、か、ら、持、っ、て、帰、っ、た、昔、で、い、う、と、私、持、っ、て、は、
を、東、京、の、支、丹、の、父、と、い、つ、た、
切、は、父、と、い、つ、た、
ら、出、す、ま、い、と、思、つ、た、
に、留、ま、つ、た、
へ、父、の、病、氣、は、幸、い、な、現、状、維、持、の、ま、ま、で、少、し、も、悪、い、方、
へ、く、進、む、模、様、は、見、え、な、か、つ、た、念、の、た、め、に、わ、ざ、り、遠、
ら、ら、れ、な、か、つ、た、私、は、冬、休、み、の、尽、き、る、少、し、前、に、国、を、立、
つ、事、に、し、た、立、つ、と、い、い、出、す、と、人、情、は、妙、な、も、の、で、
、父、も、母、も、反、対、し、た、
「もう帰るの、かい、まだ早いじゃないか」と母がい、
「まだ四、五日いても間に合うんだらう」と父がい、
「私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。」

二十四

東、京、へ、帰、っ、て、み、る、と、松、飾、は、い、つ、か、取、り、払、わ、れ、
い、た、町、は、寒、い、風、の、吹、く、に、任、せ、て、ど、こ、を、見、て、も、こ、
れ、い、う、ほ、ど、の、正、月、め、いた、景、氣、は、な、か、つ、た、
私、は、早、速、先、生、の、う、ち、へ、金、を、返、し、に、行、つ、た、例、の、椎、
茸、も、つ、い、で、持、っ、て、行、つ、た、だ、し、出、す、は、少、し、変、だ、わ、
か、ざ、ら、な、い、と、思、つ、た、母、が、こ、れ、を、差、し、上、げ、て、た、く、れ、と、い、い、ま、し、た、と、
子、折、に、入、れ、て、あ、つ、た、鄭、寧、に、礼、を、述、べ、た、奥、さ、ん、は、
次、の、間、へ、立、つ、時、そ、の、折、を、持、つ、て、見、て、軽、い、の、に、驚、
か、さ、れ、た、の、か、
「こ、り、や、何、の、御、菓、子」と聞、いた、奥、
さ、ん、は、懇、意、に、な、る、と、こ、ん、な、と、こ、ろ、に、極、め、て、淡、泊、な、
小、供、ら、し、い、心、を、見、せ、た、
二、人、と、も、父、の、病、氣、に、つ、い、て、色、々、掛、念、の、問、い、を、繰、

り、返、し、て、く、れ、た、中、に、先、生、は、こ、ん、な、事、を、い、っ、た、。
「なるほど、体が、病、氣、だ、か、ら、よ、ほ、ど、氣、を、つ、け、な、
い、よ、う、い、け、ま、せ、ん、
先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知、
つ、て、い、た、
「自分、で、病、氣、に、罹、つ、て、い、な、が、ら、氣、が、付、か、な、い、で、平、
氣、で、い、る、の、が、あ、る、病、の、特、色、で、す、私、の、知、つ、た、あ、る、士、
官、死、に、方、を、す、る、暇、も、な、ん、に、も、な、い、く、傍、ら、い、な、ん、で、
看、病、を、す、る、に、ち、よ、う、と、苦、し、い、と、い、つ、て、細、君、を、起、し、た、
夜、中、に、翌、朝、は、う、と、ば、か、り、思、つ、た、
夫、が、寝、て、い、る、と、ば、か、り、思、つ、た、
「今、ま、で、楽、天、的、に、傾、い、て、い、た、私、は、急、に、不、安、に、な、つ、た、
。
「私の父もそんなになるでしょうか。ならんともい、
え、な、い、で、す、ね、
「医、者、は、何、と、い、う、の、で、す、
「医、者、は、到、底、治、ら、な、い、と、い、う、ん、で、す、。け、れ、ど、も、当、分、
の、こ、ろ、心、配、は、あ、る、ま、い、と、も、い、う、ん、で、す、
「それ、じ、ゃ、好、い、で、し、よ、う、。医、者、が、そ、う、い、う、なら、私、
の、今、話、し、た、の、は、氣、が、付、か、ず、に、い、た、人、の、事、で、し、か、も、
そ、れ、が、ず、い、ぶ、ん、乱、暴、な、軍、人、な、ん、だ、か、ら、
私、は、や、や、安、心、し、た、。私、の、変、化、を、凝、と、見、て、い、た、先、生、
は、そ、れ、か、ら、こ、う、付、け、足、し、た、
「しかし人間は健康にしろ、どっちにしろ、ど、つ、ち、に、し、
て、も、脆、い、の、で、す、ね、。い、つ、ど、ん、な、事、で、ど、ん、な、死、に、よ、
う、を、し、な、い、と、も、限、ら、な、い、か、ら、
「先生もそんな事を考えてお出ですか、
「いくら丈夫の私でも、満更考えない事もありませ、
ん、
先生、の、口、元、に、は、微、笑、の、影、が、見、え、た、
「よく、こ、ろ、ろ、と、死、ぬ、人、が、あ、る、じ、ゃ、あ、り、ま、せ、ん、か、。自、
然、に、。そ、れ、か、ら、あ、つ、と、思、う、間、に、死、ぬ、人、も、あ、る、で、し、よ、
う、。不、自、然、な、暴、力、で、
「不、自、然、な、暴、力、つ、て、何、で、す、か、
「何、だ、か、そ、れ、は、私、に、も、解、ら、な、い、が、自、殺、す、る、人、は、み、
ん、な、不、自、然、な、暴、力、を、使、う、ん、で、し、よ、う、
「す、つ、と、殺、さ、れ、る、の、も、や、は、り、不、自、然、な、暴、力、の、お、蔭、
で、す、ね、
「殺、さ、れ、る、方、は、ち、つ、と、も、考、え、て、い、な、か、つ、た、。な、る、ほ、
ど、そ、う、い、え、ば、そ、う、だ、
そ、の、日、は、そ、れ、で、帰、つ、た、。帰、つ、て、か、ら、も、父、の、病、氣、は、
そ、れ、ほ、ど、苦、し、な、ら、な、か、つ、た、先、生、の、い、つ、た、自、然、に、死、
ぬ、と、か、不、自、然、な、暴、力、で、死、ぬ、と、か、い、う、言、葉、も、そ、だ、
場、限、り、の、浅、い、印、象、を、与、え、た、だ、け、で、後、は、何、ら、の、こ、だ、

實際その時、の私、は、自、分、の、な、す、べ、き、す、べ、て、の、仕、事、
が、す、で、結、了、し、て、こ、れ、か、な、先、心、の、な、す、べ、き、す、べ、て、の、仕、事、
上、に、構、わ、な、い、論、文、は、先、生、の、い、つ、も、の、調、子、で、「な、る、ほ、ど、」と、か、
て、い、た。私、は、い、つ、も、か、い、つ、て、く、れ、た、が、そ、れ、以、上、の、批、
評、は、少、し、も、加、え、な、け、な、か、つ、た。私、は、物、足、ら、な、い、と、い、う、そ、
日、を、私、の、氣、力、は、拍、子、抜、け、の、氣、味、あ、る、先、生、の、態、度、に、逆、襲、
す、る、大、き、な、自、然、の、中、に、先、生、を、誘、い、出、さ、し、た。外、へ、出、る、と、大、変、好、
い、心、持、て、す、」
「ど、こ、へ、」
「私、は、ど、こ、で、も、構、わ、な、か、つ、た。た、だ、先、生、を、伴、れ、て、郊、
外、へ、出、た、か、つ、た。
一、時、間、の、後、先、生、と、私、は、目、的、ど、お、り、市、を、離、れ、て、
村、と、も、町、と、も、区、別、の、付、か、な、い、静、か、な、所、を、宛、も、な、く、歩、
い、つ、て、芝、笛、を、鳴、ら、し、た。あ、つ、つ、自、然、の、鹿、見、鳥、人、を、友、達、に、も、つ、て、
の、芝、笛、と、い、う、似、を、の、を、鳴、ら、す、事、が、上、手、で、あ、つ、た。私、が、
得、意、に、そ、れ、を、吹、き、つ、づ、け、る、と、先、生、は、知、ら、ん、顔、を、し、
て、よ、そ、を、向、い、て、歩、い、た。
構、え、の、下、に、細、い、路、が、開、け、た。よ、う、に、霧、鬱、し、た、小、高、い、一、
札、す、ぐ、知、れ、た。先、生、は、の、だ、ら、だ、ら、上、り、に、な、つ、て、い、る、入、口、
を、眺、め、て、「は、い、つ、て、み、よ、う、か、」と、い、つ、た。私、は、す、
ぐ、「植、木、屋、で、す、ね、」と、答、え、た。
植、込、の、中、を、一、う、ね、り、し、て、奥、へ、上、る、と、左、側、に、家、が、あ、
つ、た。明、け、た、障、子、の、内、は、が、ら、ん、と、し、て、人、の、影、も、
見、え、な、か、つ、た。先、生、は、霧、島、で、あ、り、し、た。先、生、は、大、き、な、鉢、
「静、か、だ、ね、断、わ、ら、ず、に、は、い、つ、て、も、構、わ、な、い、だ、ら、う、
か、」
「構、わ、な、い、で、し、よ、う、」
二、人、は、ま、た、奥、の、方、へ、進、ん、だ。し、か、し、こ、こ、に、も、人、影、
は、見、え、な、か、つ、た。躑、躑、の、躑、躑、の、躑、躑、の、躑、躑、の、躑、躑、の、躑、
「こ、れ、は、霧、島、で、あ、り、し、た。先、生、は、大、き、な、鉢、
芍、薬、も、十、坪、あ、り、し、た。一、面、に、植、え、付、け、ら、れ、て、い、た、が、
ま、だ、季、節、が、こ、の、芍、薬、は、大、き、な、鉢、
か、も、の、上、に、先、生、は、大、き、な、鉢、
たい、端、の、上、に、腰、を、お、空、
い、透、徹、る、よ、う、な、空、を、見、て、い、た。私、は、私、を、包、む、若、葉、

の、色、に、心、を、奪、わ、れ、て、い、た。そ、の、若、葉、の、色、を、よ、く、よ、く、
眺、め、る、と、一、つ、違、つ、て、い、た。同、じ、楓、の、樹、も、同、じ、色、
を、枝、に、着、け、て、い、る、も、の、は、一、つ、も、な、か、つ、た。細、い、杉、苗、
の、頂、に、投、げ、被、せ、て、あ、つ、た、先、生、の、帽、子、が、風、に、吹、か、れ、
落、ち、た。

二十七

私、は、す、ぐ、そ、の、帽、子、を、取、り、上、げ、た。所、々、に、着、い、て、い、
る、赤、土、を、爪、で、弾、き、な、が、ら、先、生、を、呼、ん、だ。
「先、生、帽、子、が、落、ち、ま、し、た、」
「あ、り、が、と、う、」
「身、体、を、半、分、起、し、て、そ、れ、を、受、け、取、つ、た、先、生、は、起、き、
る、と、も、寝、る、と、も、片、付、か、な、い、そ、の、姿、勢、の、ま、ま、で、変、な、
事、を、私、に、聞、い、た。
「突、然、だ、が、君、の、家、に、は、財、産、が、よ、っ、ほ、ど、あ、る、ん、で、す、
か、」
「あ、る、と、い、う、ほ、ど、あ、り、ゃ、し、ま、せ、ん、」
「ま、あ、ど、の、く、ら、い、あ、る、の、か、ね、失、礼、の、よ、う、だ、が、」
「ど、の、く、ら、い、つ、て、山、と、田、地、が、少、し、あ、る、ぎ、り、で、金、
な、ん、か、ま、る、で、な、い、家、の、経、済、に、つ、い、て、問、い、ら、し、い、問、い、を、
掛、け、た、の、は、こ、れ、が、始、め、て、で、あ、つ、た。私、の、方、は、ま、だ、先、
生、の、暮、し、向、き、に、関、し、て、何、も、聞、い、た、事、が、な、か、つ、た。
先、生、と、知、り、合、い、に、な、つ、た、始、め、私、は、先、生、が、ど、う、し、て、
遊、ん、で、い、ら、れ、る、か、を、疑、つ、た。そ、の、後、も、こ、の、疑、い、は、絶、骨、
な、ず、私、の、胸、を、去、ら、な、か、つ、た。し、か、し、私、は、そ、ん、な、露、骨、
な、問、題、を、先、生、の、前、に、持、ち、出、す、の、を、お、ぼ、し、つ、け、と、ば、か、り、
を、思、つ、て、い、つ、て、も、控、え、て、い、た。若、葉、の、色、で、疲、れ、た、眼、を、
休、ま、せ、て、い、た、私、の、心、は、偶、然、ま、た、そ、の、疑、い、に、触、れ、
た。
「先、生、は、ど、う、な、ん、で、す、ど、の、く、ら、い、の、財、産、を、も、つ、
て、い、ら、し、ゃ、る、ん、で、す、か、」
「私、は、財、産、家、と、見、え、ま、す、か、」
先、生、は、平、生、か、ら、む、し、ろ、質、素、な、服、装、を、し、て、い、た。そ、
れ、に、家、内、は、小、人、数、で、あ、つ、た。し、た、が、つ、て、住、宅、も、決、し、
て、広、く、は、な、か、つ、た。け、れ、ど、も、そ、の、生、活、の、物、質、的、に、豊、
か、な、事、は、内、輪、に、は、い、り、込、ま、な、い、私、の、眼、に、さ、え、明、ら、
か、で、あ、つ、た。要、す、る、に、先、生、の、暮、し、は、贅、沢、と、い、え、な、い、
ま、だ、な、か、つ、た。し、け、な、く、切、り、詰、め、た、無、弾、力、性、の、も、の、
で、
「そ、う、で、し、よ、う、」と、私、が、い、つ、た。
「そ、り、ゃ、そ、の、く、ら、い、の、金、は、あ、る、さ、け、れ、ど、も、決、し、て、
財、産、家、じ、ゃ、あ、り、ま、せ、ん。財、産、家、な、ら、も、つ、と、大、き、な、家、
で、も、造、る、さ、」
こ、の、時、先、生、は、起、き、上、つ、て、縁、台、の、上、に、胡、坐、を、か、い、
て、い、た、が、こ、う、い、い、終、る、と、竹、の、杖、の、先、で、地、面、の、上、

へ円のよ うなも のを 描き 始め た。それ が 済む と、今
度 は ステ ッ キ を は 突 き 刺 す よ う に 真 直 に 立 て た。
「こ れ 生 の 元 葉 は 財 産 家 だ が 言 う で あ っ た。そ れ で
す ぐ 後 に 尾 は 行 き 損 な っ た 私 は、 つ い 黙 っ て い た
。」「こ れ で も 元 は 財 産 家 な ん で す よ、 君」と い い 直 し
た 先 生 は、 次 に 私 の 顔 を 見 て 微 笑 し た。 私 は そ れ で
も 何 と も 答 え る か っ た。 答 え る と 先 生 が 法 問 題 を 他
へ 移 し た。 「あ な た の お 父 さ ん の 病 気 は そ の 後 どう な り ま し た
」
私 は 父 の 病 気 に つ い て 正 月 以 後 何 に も 知 ら な か っ
た。 紙 は 月 々 国 外 の 通 り 手 紙 で 代 替 し、 病 気 の 上 書 体
は そ の 中 に ほ と ど 見 当 ら な か っ た。 そ の 上 書 体
も 確 か で あ っ た。 こ の 種 の 病 人 に 見 る 顛 え が 少 し も
筆 の 運 び を 乱 し て い な か っ た。
「何 と も い っ て 来 ま せ ン が、 も う 好 い ん で し ょ う」
「好 け れ ば 結 構 だ が、 —— 病 症 が 病 症 な ん だ か ら ね
」
「や っ ぱ り 駄 目 で す か ね。 で も 当 分 は 持 ち 合 っ て る
ん で し ょ う。 何 と も い っ て 来 ま せ ン よ」
「そ う で す か」
私 は 先 生 が 私 の う ち の 財 産 を 聞 い た り、 私 の 父 の
病 気 を 尋 ね た り す る の を、 普 通 の 談 話 —— 胸 に 浮 か
て 置 ま せ ぬ よう に 通 り 手 の 口 に 普 通 の 談 話 と 思 っ て
聞 い て い た。 そ の 中 が 先 生 の 言 葉 の 底 に は 両 方 を 結
び 付 け る 大 き な 意 味 が あ っ た。 先 生 自 身 の 経 験 を 持
た ない 私 は 無 論 そ こ に 気 が 付 く は ず が な か っ た。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末
をつけてもらっておかないといけないと思うがね、
余計なお世話だけれども、君のお父さんが達者なう
ちには、貰うものはちゃんと貰っておくようにした
らどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒
の起るのは財産の問題だから」
「ええ」
私 は 先 生 の 言 葉 に 大 し た 注 意 を 払 わ な か っ た。 私
の 家 庭 で そ ん な 心 配 を し て い る も の は、 私 に 限 ら ず
、 父 に し ろ 母 に し ろ、 一 人 も な い と 私 は 信 じ て い た
。 そ の 上 先 生 の い う 事 の、 先 生 と し て、 あ ま り に 実
際 的 な の に 私 は 少 し 驚 か さ れ た。 し か し そ こ は 年 長
者 に 対 す る 平 生 の 敬 意 が 私 を 無 口 に し た。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予
想してかかると言葉遣いをするのが気に触ったら
許してくれな達者なもので、いつ死ぬものだから
ものだからね」
先生の口気は珍しく苦々しかった。
「そんな事をちっとも気に掛けちゃいけません」と私
は弁解した。
「君の兄弟は誰ですかね」と先生が聞いた。
「先生は弟の上に私の家族の人数を聞いたり、親類
の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただし
た。そうして最後にこういった。
「みんな善い人ですか」
「別に悪い人間というほどのものもないですよ
。大抵田舎者で悪くはないんですか」
「田舎者は追窮苦めしんだ。しかし先生は私に返事
を考えさせる余裕さえ与えなかった。
「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいな
ものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に
、これといつて、悪い人間はいないようだが世の中
にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入
れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ
。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普
通の人間なんです。それが、いざという間に、急
に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断
ができません」
先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。
私はまたここで何かいおうとした。すると後ろの方
で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振
り返った。
縁台の横か後部へ掛けて植えてある杉苗の
傍に、熊笹が三坪ほど背を熊笹の上に現わして、盛
んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て
犬を叱りつけた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被
ったまま先生の前へ廻って礼をした。
「叔父さん、はいつて来る時、家に誰もいなかった
かい」と聞いた。
「誰もいなかったよ」
「姉さんやおっさんが勝手の方にいたのに」
「そうか、いたのかい」
「ああ、叔父さん、今日はって、断つてはいつて来
ると好かつたのに」
先生は苦笑した。懐中から墓口を出して、五銭の
白銅を小供の手に握らせた。
「おっかさんにそういってくれ。少しここで休まし

必要もなかつた。しかし暑い盛りりの八月を東京まで
来てる送らうと考へて、ええ間かいてないか。私には位置を
「まめあめ九頃ぶんどかへ行くたらまた絵端書でも送って上げ
に暑ましよう」見当です。もしいらっしゃるとすれば」
「先生はどの間を答にやにや笑って聞いていた。
「何まだ行くとも行かないとも極めていやしないん
です」席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて
、「時にお父さんの病気がどうなんです」と聞いたか
。私は父の健康について来ない以上、悪くはないのだから
うくらないに考えていた。考えられる病気がありませんよ
。「そんなに容易く考えられる病気がありませんよ
。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」
。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。
この前術語をまゝで聞かなくて、私に
「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもい
った。「毒が脳へ廻るようになる、もうそれっき
りよ、あなた。笑い事じゃないわ」
無経験な私は気味を悪がりながらも、にやにやし
ていた。
「どうせ助からない病気がですから、いくら心
配したって仕方がありません」
「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれど
も」
奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さ
んの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこういっ
た。「下を向いた。私も父の運命が本当に気の毒に
なつた。
すると先生が突然奥さんの方を向いた。
「静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」
「なぜ」
「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己
の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那
が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになって
る」
「そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどう
しても、そら年が上でしょう」
「だから先へ死ぬという理屈なかね。すると己も
お前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事に
なるね」
「あなたは特別よ」

「そうかね」
「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩った例がない
じゃありませんか。そりやどうしたって私の方が
先だわ」
「先かな」
「え、きつと先よ」
先生は私の顔を見た。私は笑つた。
「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうし
たらお前どうする……」
「どうして……」
奥さんはそこで口籠つた。先生の死に対する想像
的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつ
た。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更
えていた。
「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少
不定っていうくらいだから」
奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう
いった。

三十五

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの
付くまで二人の相手になっていた。
「君はどう思います」と先生が聞いた。
先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固
より私に判断のつくべき問題ではなかつた。私はた
だ笑つていた。
「寿命は分りませんね。私にも」
「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時に
ちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方が
ないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとん
ど同じよ、あなた、亡くなつたのが」
「亡くなつた日がですか」
「まさか日までも同じじゃなければいけません。でもまあ同
じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」
この知識は私にとって新しいものであつた。私は
不思議に思つた。
「どうしてそう一度に死なれたんですか」
奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれ
を遮つた。
「そんな話はお止しよ。つまらないから」
先生は手に持った団扇をわざとばたばたいわせた
。そうしてまた奥さんを顧みた。
「静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」
奥さんは笑い出した。
「ついでに地面も下さいよ」
「地面は他のものだから仕方がない。その代りおれ

いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。
私はそうしたが矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気が変りやすくなった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時、先死ねだらう。]
「どっちが先死ねだらう。奥さんとの間に起った疑問をひとつは私はその晩先生と奥さんとの間に起った疑問をひとつは誰も自信をもつて答える事。ができなだらう。先生はどうかするだろ。奥さん今のような態度でいるより外に仕方がないだろ。うと思つた。死に近づきつゝあるべき父を国元に控えながら、この果敢ないもの人間はどうする事もできない持て生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。

中 両親と私

一

宅へ帰つて案外に思つたのは、父の元気がこの前見た時と大して変つていない事であつた。
「ああ結構だった。ちょっとお待ち、今顔を洗つて来るから」
父は庭へ出て何かしていたところであつた。古い麦藁帽の後ろへ、日除のために括り付けた薄ないのハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻つて行つた。
学校を卒業するのを普通の人間として当然のようにならぬ私に、父はそれを予期以上に喜んでくれる父の前で、縮きまあ結構だ」
「父はこの父の喜びと、卒業式のあつた晩先生の家の食卓で、「お目出とう」といわれた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなししている先生の方が、それほどでもないものを珍しそはしまいに父の無知から出る田舎臭いところを私に感じ出した。
「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」
私はつ顔をこんな口の利きようをした。すると父が「何卒卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は構に違ひないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解つていくれさえずれば、……」
私は父から、その後を聞こうとした。父は話したくなさうであつたが、構とうこういふさ。おれは「お前の知つておれが通る病氣だろ。去年の冬お前にも会つた時、こつとよるともう三月か四月ぐらいなせうのだから、今思つていてたのさ。それがどういふ仕合せうか、今日のまてこつと居に不自由なくこうしている。そへお前が卒業してくれた。だから嬉しなかつた。後で卒業して、息子が、自分のうちにならぬうちに学

に立つものは世の中へ出てみるんだと結
論している。らな遊んでばかっているんじやない」
「おれはこうもいった。私はそれでもまだ黙っていた。
「お前のいうような偉い方なら、きつと何か口を探
して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた
。「いいえ」と私は答えた。
「じゃ仕方がないじゃあないか。なぜ頼まないんだい
。手紙でも好いからお出しな」
「ええ」
私は生返事をして席を立った。

七

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医
者も来なかった。医者の方もまた遠慮して何ともい
わなかった。父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも
自分がいなくなった後のわが家を想像して見るら
しかった。
「小修業をせよと手もなすな」と父は言っていた。父は
因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こう
いう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなか
り残さず永年住み古した田舎家の中に、たった一人取
り残さず違わなかった。父の想像はもとより淋
わが家は動かす事のできないものとの父は信じ切っ
ていた。その中に住む母もまた命のある間は、動か
す事のできないものとの信じていた。自分が死んだ後
、この孤獨な母を、たった一人伽藍堂のわが家に取
り残すのまい地位を求めるといって、私を強いたが
る父の頭には矛盾があった。私はその矛盾をおかす
のを喜んだ。同時に、そのお蔭でまた東京へ出られる
私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力
で求めつつあるごとくに装おわなくてはならなかつ
た。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述

べた。もし自分で力とでできる事があつたら何でもす
るから取り取る。しかると私に頼んだら私の依頼
。しるだろし先生を封じ書して出まじでとくそ
「先生に手紙を書てお出しな」
母は私の想像したごとく早くお出しな。そ
「そんか、いそいで自分早くやるも
母は私をまだ子供のように思っていた。私も実
子供のよ手紙で、私が東京へ出てからでなくちゃ
「そりゃそんな口がなげんやないんだから、
早く頼んでおくに返事は来ないよ」
「ええ」とかお話しなすよ」
私は先生の返事来るのを待ちに待った。けれど
ども私の予期は信もなかつた。行っているんでし
「大方どこかへ避暑に言っただけの言葉を使わな
ならなくて、自分の心でその言葉は母に對する言
ばかりでなく、自分の心でその言葉は母に對する言
私は強いても何かの事情を仮定して先生の態度を
私に時々父の病気を忘れた。いそ早く東京へ出
てしまおうかと思つた。その父自身もおのれ
の病気を忘れる事があった。未来をた。私はつい
未来に對する所置は一向取らなかつた。私はつい
先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機
得ずに過ぎた。

八

九月始めになつて、私はよいよまた東京へ出よ
うとした。私は父に、向かつて当分今まで通り学資を
送ってくれるように頼んだ。
「この地位が得られるもじゃあないですから」
私は父の希望する地位を得るために東京へ行くよ

、極めて少なくな。た。医者はそれ。を。苦。に。した。食。夜は母が起。て。い。番。に。当。つ。て。いた。し。か。し。の。母。は。父。の。横。に。眠。り。の。裏。に。忍。び。足。で。ま。た。自。分。の。寝。床。に。入。っ。て。い。た。静。か。に。帰。っ。た。。

私は兄といっしょの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけには、客扱いを受けているせい、独り離れた座敷に入っただけだ。休んだ。毒だね。ああ幾日も引っ張られて帰れなくっちゃあ。関というのはその人の苗字であつた。関と。い。う。の。は。そ。の。人。の。苗。字。で。あ。つ。た。だ。か。ら。あ。あ。し。か。し。そ。ん。な。忙。し。い。身。体。で。も。な。い。ん。だ。か。ら。あ。あ。し。て。泊。つ。て。い。る。て。く。れ。し。よ。う。関。さ。ん。よ。り。も。兄。さ。ん。の。方。も。困。つ。て。い。ら。し。い。外。は。こ。の。事。と。違。う。か。ら。な。い。と。い。う。兄。の。頭。に。も。私。の。胸。に。も。父。は。ど。う。せ。い。な。い。も。の。な。ら。ば。と。い。う。考。え。も。あ。つ。た。我。々。は。子。と。し。て。親。の。死。を。待。つ。て。い。る。よ。う。な。も。の。で。あ。つ。た。し。か。し。子。と。し。て。の。我。々。は。お。互。い。を。言。葉。互。い。に。ど。ん。な。事。を。思。つ。て。い。る。か。を。よく。理。解。し。合。つ。て。い。た。。

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

、極めて少なくな。た。医者はそれ。を。苦。に。した。食。夜は母が起。て。い。番。に。当。つ。て。いた。し。か。し。の。母。は。父。の。横。に。眠。り。の。裏。に。忍。び。足。で。ま。た。自。分。の。寝。床。に。入。っ。て。い。た。静。か。に。帰。っ。た。。

私は兄といっしょの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけには、客扱いを受けているせい、独り離れた座敷に入っただけだ。休んだ。毒だね。ああ幾日も引っ張られて帰れなくっちゃあ。関というのはその人の苗字であつた。関と。い。う。の。は。そ。の。人。の。苗。字。で。あ。つ。た。だ。か。ら。あ。あ。し。か。し。そ。ん。な。忙。し。い。身。体。で。も。な。い。ん。だ。か。ら。あ。あ。し。て。泊。つ。て。い。る。て。く。れ。し。よ。う。関。さ。ん。よ。り。も。兄。さ。ん。の。方。も。困。つ。て。い。ら。し。い。外。は。こ。の。事。と。違。う。か。ら。な。い。と。い。う。兄。の。頭。に。も。私。の。胸。に。も。父。は。ど。う。せ。い。な。い。も。の。な。ら。ば。と。い。う。考。え。も。あ。つ。た。我。々。は。子。と。し。て。親。の。死。を。待。つ。て。い。る。よ。う。な。も。の。で。あ。つ。た。し。か。し。子。と。し。て。の。我。々。は。お。互。い。を。言。葉。互。い。に。ど。ん。な。事。を。思。つ。て。い。る。か。を。よく。理。解。し。合。つ。て。い。た。。

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

「お父さんは、まだ治る気であるようだ」と兄が私にいった。

「お父さん、結構です」と妹の夫もいった。

「何れも口だ更それら」

私は今更それら

何とも訳の分

立

十四

父の病は最後の。一撃を待つ間。際まで進んで来て。は。運。命。の。宣。告。が。今。日。下。る。か。と。思。つ。て。毎。夜。床。に。は。い。つ。つ。と。辛。く。す。る。ほ。ど。の。苦。痛。を。ど。こ。に。も。感。じ。て。あ。る。起。き。て。は。い。き。た。取。つ。た。時。病。人。の。一。遍。半。夜。に。床。を。抜。け。出。て。お。前。の。卒。業。祝。い。は。已。め。に。な。つ。て。結。構。だ。お。れ。の。時。に。は。弱。っ。た。コ。ー。ル。に。煽。ら。れ。た。そ。の。時。の。乱。雑。な。想。象。私。は。出。し。て。苦。笑。し。た。飲。む。が。私。の。眼。に。映。つ。た。私。た。ち。は。そ。れ。ほ。ど。仲。の。好。い。兄。弟。で。は。な。い。か。つ。た。小。さ。い。う。ち。は。好。く。喧。嘩。を。し。て。年。の。少。な。い。私。の。方。が。い。つ。つ。でも。泣。か。れ。た。学。校。へ。は。い。つ。て。な。ら。の。専。門。の。相。違。も。私。は。全。く。性。格。と。相。違。か。ら。出。て。い。た。大。学。に。い。る。時。分。を。眺。め。て。常。に。動。物。的。だ。と。思。つ。て。い。た。私。は。遠。く。は。長。く。兄。に。会。わ。な。か。つ。た。た。の。で。ま。た。懸。け。隔。つ。た。遠。く。に。い。た。の。で。時。か。ら。い。つ。つ。と。距。離。が。あ。ら。う。な。い。と。思。つ。て。い。た。兄。は。い。つ。つ。でも。私。に。は。近。く。な。つ。た。の。で。あ。る。そ。れ。で。も。久。し。ぶ。り。に。こ。う。落。ち。合。つ。て。み。ると。兄。弟。の。優。れ。な。い。心。持。が。ど。こ。か。ら。か。自。然。に。湧。い。て。出。た。場。合。が。多。い。と。思。つ。て。い。た。二。人。に。共。通。な。父。の。源。因。に。な。つ。て。い。た。

の死のうとして枕元で、兄と私は握手したのであった。
「お前、これかどうする」と兄は聞いた。私はまた「全く見当の違った質問を兄に掛けた。私はまた「一体家の財産はどうなってるんだろう」「おれは知らない。お父さんはまだ何もいわないから。しかし財産っていったところで金としては高の知れたものだろう」
母はまた母で先生の返事の来るのを苦しめていた。
「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

十五

「先生先生というの一体誰の事だい」と兄が聞いた。
「こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。
「聞いた事は聞いたけれども」「兄は必竟聞いても無理に先生を兄に理解してもらわなければならない。けれども腹は立った。また例の兄らしい所が出て来たと思った。
先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっている、だろう。兄の腹はこの点において、父をと全く同じものであるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限るといった風の口吻を洩らした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというの横着な簡だからね。人は自分のもよっている才能をできるだけ働かせなくっちゃ嘘だ」
私は兄に向かかって、自分の使っているイゴイストという言葉の意味がよく解るか聞き返してやりたかった。
「それでもその人のお蔭で地位ができればまあ結構だ。お父さんも喜んでようじゃないか」
兄は後からこんな事をいった。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、また紙その口に出す勇氣もなくて。それを母の早呑み込みにみんなにそう吹聴してしまっただけで、私と、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくな

私は母に催促されてるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙が、どうかみんないの考えを念じた。私は死に瀕して父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、その父の夫だ伯父だの叔母だの、その他妹の伯父だの叔母だの、私のちっとも頓着してない事に、神経を悩まらなかつた。
父が変な黄色いものも嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くないはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者が帰り際に兄に向っていった事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。
「お前ここへ帰って来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。
「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまたいった。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行っても惜しくないように見ていた。
「本を読むだけなら、田舎でも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」
「兄さんが帰って来るのが順です」と私がい

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。
「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それならしてもお母さんはどっちかで引き取らなくっちゃなるまい」
「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」
兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合った。

十六

父は時々囁語をいうようになった。
「乃木大將に語りなさい。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」
こんな言葉をひよひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれ

「私閉は奥さんに気が毒でし、たけれども、ま、た立って
 今燈に油が私に口からして、後しました。それかあ、後、の、奥さん、の、態、度、は、さ、す、が、に、軍、人、の、未
 亡人も、う、み、そ、せ、Kは、し、ま、し、せ、ん、血、潮、た、に、に、驚、奥、K、の、彼、汚、二、電、私、が、ま、し、た、が、ん、ま、い、悲、滴、た、私、に、私、何

「私閉は奥さんに気が毒でし、たけれども、ま、た立って
 今燈に油が私に口からして、後しました。それかあ、後、の、奥さん、の、態、度、は、さ、す、が、に、軍、人、の、未
 亡人も、う、み、そ、せ、Kは、し、ま、し、せ、ん、血、潮、た、に、に、驚、奥、K、の、彼、汚、二、電、私、が、ま、し、た、が、ん、ま、い、悲、滴、た、私、に、私、何

「私閉は奥さんに気が毒でし、たけれども、ま、た立って
 今燈に油が私に口からして、後しました。それかあ、後、の、奥さん、の、態、度、は、さ、す、が、に、軍、人、の、未
 亡人も、う、み、そ、せ、Kは、し、ま、し、せ、ん、血、潮、た、に、に、驚、奥、K、の、彼、汚、二、電、私、が、ま、し、た、が、ん、ま、い、悲、滴、た、私、に、私、何

「私閉は奥さんに気が毒でし、たけれども、ま、た立って
 今燈に油が私に口からして、後しました。それかあ、後、の、奥さん、の、態、度、は、さ、す、が、に、軍、人、の、未
 亡人も、う、み、そ、せ、Kは、し、ま、し、せ、ん、血、潮、た、に、に、驚、奥、K、の、彼、汚、二、電、私、が、ま、し、た、が、ん、ま、い、悲、滴、た、私、に、私、何

換わす事、が、あ、り、ま、し、た、が、ん、そ、れ、は、当、座、の、の、用、事、に、つ、い、る、
 て、の、ど、も、と、だ、い、壊、ろ、そ、し、と、同、国、を、。私、歩、い、な、あ、っ、思、の、話、父、も、兄、も、私、の、
 換わす事、が、あ、り、ま、し、た、が、ん、そ、れ、は、当、座、の、の、用、事、に、つ、い、る、
 て、の、ど、も、と、だ、い、壊、ろ、そ、し、と、同、国、を、。私、歩、い、な、あ、っ、思、の、話、父、も、兄、も、私、の、

「Kの葬式、路に、私、は、そ、う、の、友、人、の、一、人、か、ら、ま、
 Kがどうして、自、殺、した、の、だ、ら、う、も、何、さ、う、い、う、質、問、な、く、お、し、ら、せ、
 した。事件、が、あ、れ、た、の、は、父、兄、も、通、知、記、か、れ、に、聞、か、し、た、と、白、
 問、で、苦、し、め、ら、れ、て、出、て、は、何、に、問、は、そ、う、し、て、私、に、こ、え、し、た、と、
 国、か、ら、出、て、は、何、に、問、は、そ、う、し、て、私、に、こ、え、し、た、と、白、答、え、は、
 同、様、の、良、心、は、そ、う、し、て、私、に、こ、え、し、た、と、白、答、え、は、書、加、え、掛、け、
 の、良、心、は、そ、う、し、て、私、に、こ、え、し、た、と、白、答、え、は、書、加、え、掛、け、新、聞、
 した。と、白、答、え、は、書、加、え、掛、け、新、聞、に、は、そ、の、外、に、友、人、は、こ、の、外、
 の、私、宛、附、け、書、加、え、掛、け、新、聞、に、は、そ、の、外、に、友、人、は、こ、の、外、に、
 の、私、宛、附、け、書、加、え、掛、け、新、聞、に、は、そ、の、外、に、友、人、は、こ、の、外、に、
 の、私、宛、附、け、書、加、え、掛、け、新、聞、に、は、そ、の、外、に、友、人、は、こ、の、外、に、

死んだ後で、妻から頼死したと思われないのです。
気が狂ったと、思われても満足なのです。
私が死のうと決心してからは、もう十日以上になり
ます。その大部分はあなたに使用されたもので、長い自叙伝の
一節を書き残すために、かえって話をする気が自分判然と描き
。始めてみるに、かえって心持がして、嬉しむので、私過
出す事興で書くの経験は、一部分として、私より外に誰も書
は去語り得るの置私に、外に、人間を知らず、徒らに描く
かたに、死期を一周間から見たら、余計な事な相応の要
達解が心の中にあるの努力も単にありません。半ば以上は
がですよ。私か今その要求は、もう何に落
たす要求し、私には、もう私には、もう私には、もう私には、
身し、私には、もう私には、もう私には、もう私には、
もする事は、私には、もう私には、もう私には、もう私には、
ちる頃には、私には、もう私には、もう私には、もう私には、
とく市ヶ谷の叔母の所へ行きまして、叔母が病気で手が
足らないという間、ここの間に、私が勤めてやっただけで、私
妻の留守時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しまし
した。

私は私の過去を善悪ともに他の参考にするつも
りです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知
して下さい。私は妻には何にも知らせたくないので
す。妻が己れの過去に対してやっていたものが、妻の唯一の希望
純白のすから、私が死んだ後でも、私が生きてい
な以上は、あなたに打ち明けられた私の秘密とし
て、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しまし
た。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」
（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：jutiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2010年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文
庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入
力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆
さんです。